那覇市立教育研究所
研究所だより

「教育実践研究論文」優良賞受賞（3名）

那覇市金城 3－5－3
所 長　田 中　浩 三

●平成 24 年 1 月 21 日（土）に共済会館「八汐荘」大ホールにおいて、「第 19 回教育実践研究論文」の表彰式が行われ、本研究所修了生の三名が優良賞を受賞しました。受賞された皆様おめでとうございます。今後とも研究成果を活かしご活躍されることを祈念申し上げます。

「書くこと」を考える

所長　田中　浩三

「自分の思いや考えを言葉・文章で表し、伝えることの難しさを痛感しました。」

本教育研究所の研究員が日々論文をまとめるのに勤しんでいる中で度々出てくる言葉である。研究員に限らず、自分の思いや考えを文章に表すことの難しさは誰しもが感じているところだと思う。お互いはこれまで、学校教育を通じて「国語」としての「書くこと」の教育を受けてきている。さらには日常的に言葉・文章を伝達のツールとして活用してきており、そのノウハウ等は身に付けている。にも関わらず、「書くこと」を敬遠する傾向が強いように感じる。

その理由として、日常生活の中で「書くこと」より「話すこと」の方が言葉の伝達ツールとしては一般的であり、そのため、「書くこと」の活用頻度が低く「書く習慣」が身についていないからではないかと考えてみた。それは次のような両者の伝達方法の違いからも考えられる。

「話すこと」の場合、常に相手と対面しながら手振りや身振りを交えたり表情や声のトーンで補ったり、また言葉の使い方を少々間違えても言い直しや補足しながら言葉を伝達している。

ところが「書くこと」では、伝える対象がほとんど見えず、自分の思いや考えを文字のみで伝達することになる。その場合、どうしてもきまりに則った文のつくりや適切な語句の選択、筋道立てて相手に伝える内容の構成等、文章作りのノウハウを駆使して書くことが要求される。そのため、「書くこと」に躊躇したり時間がかかったりして「書く習慣」が進展していかなかったからではないかと思う。

「書く習慣」を身につけさせるためには、やはり学校教育の中で「書くこと」の基礎基本を徹底して指導する必要がある。「何を」「どのように」書けるかによってこそ習慣化につながるのであって、自由に書かせていては一向に力がつかないことはお互い周知のことである。

今日、学校教育の中で「書くこと」の重要性が叫ばれている。それは前述の如く、「書くこと」には文の決まり等の「基礎的基本的知識・技能」や筋道立てて書く「思考力・判断力」等の表現力につながる全ての要素が含まれているからだと思う。

１月１８日（水）に勝連慈士研究員、１月１９日（木）に屋嘉部智美研究員の「検証授業（保育）」が行われました。

第97期 研究員 検証授業 中間検討会Ⅱ

検証授業を通して，検証の視点を明確に持つこと，仮説に対する手だてを具体的に示すことの大切さを学びました。これから，子どもたちがどう変容したか，それはどのような働きによってもたらされたのか，しっかりと考察していきたいと思います。（勝連）

自分自身の保育を客観的に見つめることができ、今後、検証の結果や考察、成果や課題のまとめをするにあたっての見通しをもつことができました。（屋嘉部）

１月 31 日（火）に「中間検討会Ⅱ」が行われました。

研究員も最後の追い込みで、お互い意見を求めながら取り組んでいるので、違った視点から見てもらいながら、一緒に完成させていきたいと思います。（大城）

細かい言葉の使い方や表と図のタイトルの位置など、またグラフを人数ではなく％で表した方がよいこと等も教えていただきました。（島村）

祝・第 19 回教育実践研究論文表彰

優 良 賞　第 96 期長期研究員

松川好孝　真嘉比小学校教諭

「積極的にコミュニケーションを図る児童の育成」
～「タスク活動」と「『つなぎ言葉』を取り入れた活動」を通して～

大城香識　真地小学校教諭

「数学的な思考力・表現力を高める指導の工夫」
～子どもの思考をつなげる手立て～

第 95 期長期研究員の**高良奈緒子**
松島中学校教諭も「特別な支援を要する生徒への対応に視点をおいた授業展開の工夫」
～国語科の授業実践を通して～の論文テーマで優良賞を受賞しました。受賞された皆様、おめでとうございます。今後のご活躍を期待しています。

第４回 コンビニ国語講座開催

２月８日(水)に、第４回「コンビニ国語講座」が開催されました。第４回目は「『言葉のレンズ』で鑑賞しよう」というテーマで「俳句」を味わう講座でした。参加された先生方の感想を掲載いたします。

○講座で「言葉のレンズ」で鑑賞したり、「ショートストーリー」を創作して、子どもたちが俳句を引き寄せた時、深く深く俳句を考えより添い、忘れられない学びになると実感しました。

○子どもの心より添う、そして、何というか喜びを与えられる授業をやればよいのだと勇気をもらいました。

○「授業改善」とは教師の意識改革だと何度も言われてきましたが、「俳句」の講座で「言葉のレンズ」を通して実感しました。何年後かに剥がれ落ちていく「知識」を注入するよりも、国語に親しみ、言葉と遊んで、その時々の自分の思いを表現できる人を育てていくことが大切ですね。

○俳句の鑑賞の授業というと、名句の深みをどう読み解くか、としながらも、大人の読みの一方的な押し付けだったり、知識の伝達だったように思います。今日の講座で、味わうというのは、優れた句を読んで心に響いたことを交流し合う中で楽しむことだと思いました。その手立てとしての「言葉のレンズ」はすごい発見だと思います。何十年も教えて来た句の言葉のプリズムに打たれました。